安城市での取り組み

―平成 15 年度自主防災会支援事業―

安城市からの事例発表として、平成 15 年度安城市自主防災会支援事業について話をしていただきました。もともとはＮＰＯ愛知ネットが自主事業として活動していた内容を、安城市に提案したことで、自主防災会支援事業という事業になったものです。安城市箕輪町などで実践されています。

講演：岡坂健　　NPO 法人 NPO 愛知ネット職員

Profile・・・1976 年長野県生まれ。日本福祉大学社会福祉学部卒業。南東北・北関東豪雨（98 年）北海道・有珠山噴火（00 年）などで現場の支援活動をする。01 年からＮＰＯ愛知ネット職員。災害時に情報発信の援助をするほか、日常活動として防災のための講座、理解を深めるためのイベントを各自治体とともに行う。（※2004 年 6 月 5 日現在）

■長時間化と年齢層の拡大という２つのテーマ

もともと NPO 愛知ネットで独自にやっていた体験型防災訓練というのがありました。地域の防災の課題は非常に多いのですが、とりあえず、地域で今展開されている防災訓練を、もう少し実践的なものに変えてはどうかという視点で考えました。具体的には地域密着型の活動と地域の防災力向上のために、これまでの訓練とは違った形の訓練が必要だろうと、２つのテーマを設けました。まず防災訓練というのは、朝 9 時から始まって昼の 12 時に終わり、炊き出しのご飯を食べて終わるというのが、普通のパターンです。たった 3 時間では地域の防災訓練はできません。まずは、時間の長時間化、つまり、１泊２日程度の長時間化の防災訓練ができないかというのがひとつです。

もうひとつは、参加される方の年齢層の問題です。今までは町内の役員さんをおやりになっている年配の方が主な参加者だったのですが、子どもやその親の世代、さらには 10 代 20 代も含めたの参加者の年齢層の拡大、という２つのテーマを持って、今までとは違う防災訓練ができないかという視点で考えました。

■親子防災キャンプと避難所体験

そこで、平成 14 年度から始めたのが「親子防災キャンプ」です。はたからは、ただのキャンプにしか見えないのですが、ボーイスカウトがやるようなシステムキャンプの簡易版です。ロープワークの実践や炊き出しを行い、例えばご飯を作るときに水の量を制限するといった工夫をところどころにこらし、どちらかというと楽しさを主眼にした防災キャンプを、2 回させていただきました。

その防災キャンプを体験し、ファンになった参加者の人たちと一緒に、さらに、このキャンプを学校の体育館でやってみないかというテーマを出して始めたのが、平成 15 年 11 月に安城市北部小学校で行った「避難所体験」という体験活動です。

ですから、流れが全く違うのです。防災訓練を変えようということではなくて、まず、キャンプをやってしまってから、キャンプを学校でやってみないかということです。それをもって避難所体験という形式にしました。防災訓練というよりは、キャンプを学校でやっているという雰囲気です。そこここに、いろんなプログラムを施しています。

一番左上の写真は、ダンボールハウスで子どもがピースしています。体育館の中でダンボールの仕切りを作ってやっています。真ん中は、町の中を歩く「オリエンテーリング」というプログラムで、途中で消防団のお兄さんからスタンプをもらわないと通れないという仕組みです。

それから後は、途中のチェックポイントです。井戸を探して、井戸水を何回か汲んでみたり、左側の真ん中の段の写真では、女性がへたりこんでいますが、かばんの中に防災グッズが入りきらなくて困っています。

その他いろいろ、炊き出しや、図上訓練などを含め、とにかく小学校の中でそういった体験活動と、もともとキャンプが好きな人たちとを、からめたうえでやってきました。

■安城市自主防災会支援事業に

この訓練の模様を安城市の防災担当の方がご覧になっていて、これは非常にいいプログラムだということになり、一つ一つのプログラムを部品のような形でパッケージ化をしまして、いくつかあるうちの 3 つなら 3 つを選んで、防災訓練を組めるというプログラムセットとして組み直しました。

これを組み直した上で、安城市に体験型防災訓練として提案をさせていただきました。その提案の内容が、資料 1「体験型防災訓練のご案内」です。こういう資料をわれわれで用意して、市と協働で何かできないでしょうかというお話をさせていただいております。

また、資料 2（1 番から 16 番までの、先ほど安城市のワークショップの一連のメニュー）のとおり、「こういったものをわれわれがやれます、こういったもので、各ご町内や各自主防災会を回ったかたちで、今まで行われている防災訓練よりも、さらに面白くて、訓練の長時間化と年齢層の拡大を図った、実効性のある防災訓練が展開できます」という提案をさせていただきました。最終的には、「安城市自主防災会支援事業」という名称になり、安城市の事業として平成 15 年度に展開されることになったという経緯です。

資料１

体験型防災訓練のご案内

平成 15 年 4 月 29 日
特定非営利活動法人 NPO 愛知ネット

自主防災会の実施する防災訓練や防災の啓発活動をより充実させ、かつ新しい訓練メニューが簡単に導入できる新しい防災訓練の取り組みである「体験型防災訓練」を提案します。

提案の経緯と目的：

昨年 6 月に中央防災会議が東海地震の震源域を西に 50 キロメートル修正したことから、安城市も 6 弱以上の震度が予測される強化地域に指定されました。

そこで、来るべき巨大地震に備えるため、町内会・自主防災組織の地域単位において対策を考え、そのための訓練や学習機会を提供することは重要な課題となっています。さまざまな体験型の演習を実施し、実際に被災したときの問題点を見出し、それに対して継続して取り組むことの動機づけを目的としています。

訓練の概要：

「体験型防災訓練」は避難時から避難所生活までのシミュレーションを行い問題点を見つける訓練です。自主防災会で行う地域防災訓練を、スタッフを派遣する形で企画段階から支援します。内容は訓練メニュー（別表）からいくつかを選択していただきます。それらを組み合わせ各地域に沿った形でアレンジします。会場は避難所となりうる学校などの地元の施設を使い、町内会・自主防災組織・個々人に呼びかけ、実施していく形式です。具体的には以下のとおりです。

（1）自主防災組織の要望に合わせて、柔軟な企画運営を支援します。
（2）事前の企画提案とその実施には、自主防災組織との綿密な打ち合わせを行います。
（3）自主防災組織の地域における特色を生かした訓練を考えます。
（4）避難所での宿泊体験など、体験型の訓練を提案・実施します。
（5）あいち防災リーダー（市内取得者１５名）と連携して実施します。
（6）訓練メニュー１６プランから地域に見合った訓練種目を選択できます。
（7）可能であれば小学校区単位での実施も考えます。子どもやその親等、若い世代の参加を促します。

対象者：

市内の町内会・自主防災会・防災リーダー・町内の希望者などで広い年齢層が対象です。体験学習的要素を取り入れ、高齢者や家族単位での参加を考えています。

資料２

訓練メニュー

（以下の中から各地域に合ったプランを選んでいただけます。）

①炊き出し	普段作らない大量の食事をつくるのにどのような器材や方法が必要か。限られた材料の中からのメニューの選定や配膳方法などを考えます。
②震災の体験を聞く 神戸被災体験者から話をきく	神戸被災体験者から話をきくことで震災の恐ろしさや教訓を学びます。
③ビデオ学習	被災状況を振り返るビデオを鑑賞します。
④防災マップ作成 or 防災オリエンテーリング	地域をまわって危険個所や役に立つものを確認し、地図上にマークをしていきます。避難所である宿泊会場に向かって地図を持って歩いていき、チェックポイントにいるスタッフが通行止め、家屋倒壊、ガス管破裂、火災、要救援などいくかの課題を与え、それをクリアしながらゴールにたどり着く。
⑤防災倉庫・設備の見学 （町にある防災設備を見に行こう）	実際にある防災設備や、避難した時に使用する防災倉庫の中身を確認し、それを踏まえて避難所生活を考える。
⑥ワークショップ 「地域の防災を考えよう」	今までの学習を踏まえた上で、地域どのような取り組みが必要か、そのために何が必要かを考えてまとめます。
⑦応急手当講習	救援時に必要な三角巾や骨折、やけどの処置などを学びます。
⑨タンス倒し体験及び家具の固定方法を考える。	タンスを倒してその下にあるもののつぶれ具合や、崩れ方を確認します。例：人形・野菜（大根など）家具が倒れてくることの恐ろしさの体験と家具固定の大切さ、固定のノウハウなどを学びます。
⑩消火体験	火を燃やして消火器やバケツリレーなどで消火をします。火の恐ろしさと初期消火の方法・消火器の使い方を学びます。
⑪ワークショップ 「家庭で備えるには」	今までの学習を踏まえた上で、いざ時のために、家庭での備えはどうあるべきか、を考えてまとめます。
⑫避難所運営体験	避難所の運営方法や受付方法など、過去の被災地の避難所運営マニュアルから学びます。
⑬ロープワーク	避難所生活、テント生活、初期救助、避難時などに役に立つロープの結び方、使い方を学びます。
⑭イニシアチブゲーム	イニシアチブ＝率先して発言したり行動したりして、他を導くこと。主導権。→率先してグループを組んだり互いの関係性を認識するためのゲームをとおして、被災時や防災のための集団づくりを学ぶ。
⑮救援物資整理講習	避難所生活と切り離せない関係にある救援物資をどう整理してどう配布していくか？を考えます。
⑯ワークショップ 「災害時、自分たちにできることは何か」	今までの学習を踏まえた上で、いざとなったら自分たちには何ができるか、どうするか、そのための準備はどうあるべきか、を考えてまとめます。

発表者：杉浦弘之　安城市総務部防災室　室長補佐

Profile・・・1977 年、安城市役所入所（電子計算課）。2002 年、総務部行政課（防災担当）。2003 年、総務部行政課（消防防災担当）。2004 年、総務部防災室。（※2004 年 6 月 5 日現在）

■市内全域をカバーする自主防災組織

まず、安城市の自主防災組織の現状について説明します。安城市には 79 の町内会がありますが、そのうちで 72 の自主防災会ができています。79 町内会で 72 の自主防災組織ということですが、2～3 の町内会が連合で自主防災組織を作っているところもあるので、市内全域をほぼ 100％カバーしています。

そういう自主防災組織に対して、自主防災組織の運営費を、規模に応じて補助をしています。また、14 年度からは、地域の実情に応じた資材の充実も必要であり、資材に対する購入補助もしております。

■ＮＰＯからの提案

そういった中で、各自主防災組織さんから、「こういう補助金をもらったけど、どういうふうに使えばいいの？運営費補助って何に使うの、資材だけ買えばいいの？」という質問がくるようになりました。安城市も広いものですから、農業地域もあれば、工業地域もあれば、商業地域もあります。農業地域に至っては、すぐ裏が田んぼですので、避難する場所はそこでいいわけです。食料の備蓄も、「うちの倉庫にひと月くらいの米はあるよ」というところもあれば、「建物が密集していて、１ヶ所火事が起きれば周辺が丸焼けになってしまう」というところもあるのです。そういった意味で、「それぞれのところで何が必要か考えてください」と言っています。

そのため、自主防災訓練についても、初期消火や炊き出しをずっとやっておる自主防災組織もあれば、何をやったらいいのかわからないというところもあるわけです。そういう自主防災組織が、何か新しいアイデアはない？ということで、市のほうに来るわけですが、市としても、人員的にとてもそれだけの自主防災組織に毎回顔を出したり、相談に乗れる状況ではありませんでした。

そういう中で、NPO 愛知ネットさんから、自主防災訓練についての提案を受けました。これを出さない手はないということで、協働してやっていきましょうということになりました。また、費用についても、緊急雇用の関係で 100％の補助が出るため、非常にスムーズに運んだわけです。

そのような経緯がありまして、この事業が進められました。全ての自主防災組織に応募を募ったところ、最終的に７つの自主防災組織で５回実施しました。実施期間は平成１５年６月から平成１６年の２月までで進めました。

その結果、今日発表していただきます箕輪町の町内会さんのように、来年度、もし NPO の支援がなければ、自分のところでやってもいいかなというような話まで出るところもあれば、逆に、ちょっと悩んじゃったなというところもあるということで、ある程度の効果はあったと思います。

今後、自主防災組織が、自分たちで防災について考えて、自分たちでまちを守るという方向に進んでいく、という機会が少しでもおきればいいかなということで、平成１６年度についてもこの事業を進めていきたいと考えています。

講演：鳥居　肇

安城市箕輪町町内会々長、箕輪町自主防災会々長

Profile・・・1935 年生まれ、1995 年(株)マキタを定年退職後、地域社会に貢献をと思い、1996 年町内公民館長、2002 年町内会々長を歴任、自主防災会々長及び福祉委員会々長を兼任し現在に至る。任期中、町内の自主防災活動の立ち遅れを懸念し、2002 年第１回あいち防災カレッジを受講し修了、その後 2004 年日本防災士機構の「防災士」を認証取得する。（※2004 年 6 月 5 日現在）

■箕輪町の自主防災組織

安城市の箕輪町は新幹線の三河安城駅の南に位置する集落です。日本のデンマークといわれた農業地帯ですが、現在では新幹線ができたおかげで、新幹線駅前には 40 棟近くのマンションがあります。そのマンションの方を含めると 5,000 人強の人口になると思います。

ですが、町内会に入っていろいろ活動の手伝いをしたり、協力していただける方は、現在 780 人強しかございません。加入率は 36%ということになります。この 36%の方しか、町内会に加入していただいていないし、自主防災会の活動にも参加していただけないという状況です。

■まずは図上訓練

愛知防災カレッジで谷口先生のお世話になりました。町内会の仕事をやりながら名古屋へ毎週通って、修了させていただきましたが、その成果をふまえて図上訓練をまずやろうという役員の中の意思統一を図りました。防災マップ作りもいいんですけれども、自分たちの町を自分たちで知ろうということを観点に、スタートしたわけです。

図上訓練の様子

形だけの防災訓練だけじゃなくて、現在の立ち遅れている自主防災会の活動をいかにしていこうかとして考え付いたのが、「向こう三軒両隣の助け合い」で、それをテーマに一貫して運営してきました。また自主防災会での

有事の際の招集計画が平成 14 年度からありましたので、それにのっとって、こういった招集者のレベルで企画をして実施に移しました。NPO 愛知ネットの岡坂さんに、図上訓練を徹底的にやっていただきました。役員のレベルから、組長のレベル、隣組長のレベルという形で、通しで３回の図上訓練を実施いたしております。

一番心配したのは、こういった集団で何かをやるときに、だいたい、「わしゃ関心ない」という方が２～３人いることです。そういう何にもやらない傍観者が今回１人も出なかったというのは非常によかったと感じております。

■災害弱者を巻き込んだ避難

最終的な総合訓練に到達する中で、各組ごとに、図上訓練の経験を活かして自分たちの第一避難場所はどこを通ってどう行くと一番安全かということを、自主的にやっていただきました。

「自分たちの町は自分たちで守ろう。自分たちの命は自分たちで守ろう」ということでも、災害弱者を自主的に手助けするのは非常に難しいわけですね。それで今回１番から５番までの組を対象に、１世帯に１名程度、子どもやお年寄りなどの災害弱者に参加していただきました。保護者や介護者をつけていただきましたが、「会長、何考えとるんだ。あんなおじいさんやおばあさんを、こんな訓練に引っ張り出して」、という批判はずいぶんありました。しかし、じゃあ災害弱者はほっとけばいいかという訳にはいきませんので、そういう批判も受けながら進めてきたわけです。

その図上訓練で習得した避難は、NPO さんの指導がうまかったものですから、頭によく入っちゃったわけです。それで非常に順調で、まとまりのある避難ができました。まず、ひとつの訓練の目的である、避難道路を自分たちで決めて総合避難場所まで来るということが達成できました。それから、初期消火、ここに書いてある 6 項目が終わりました。一番最後に全員で反省会をしまして、次の訓練にどういかしたらいいか皆さんから意見を聞いて、終わりましたけれども、非常にまとまりのある避難訓練ができたということで感謝を申し上げます。